

第5回

日本臨床中医薬学会学術集会

プログラム・抄録集

会期：2005年10月29日（土）

会場：川崎市産業振興会館9階第3研修室

〒212-0013川崎市幸区堀川町66番地20

会長：酒谷 薫（日本大学医学部脳神経外科講座教授）

主催：日本臨床中医薬学会

教育講演 I

21 世紀の日本社会が漢方医学に期待するもの

渡辺賢治

慶應義塾大学医学部漢方医学講座

20 世紀後半の繁栄の時期を経て 21 世紀に入り、日本は大きな変革期に来ている。その理由の一つは社会構造の変化であろう。高齢化が進み、2005 年には 65 歳以上の高齢者率が 20% を超え、人口も減少傾向に転じた。さらに 2015 年には 25% を超えると予想されている。

その一方で少子化が進み、出生率は 1.29 人と世界の中でも低い水準となっている。これら少子高齢化によって経済的基盤を支える生産人口が減少しつつある。

こうした社会変化は医療行政にも影響する。生産者人口の減少に伴い、生産者の税負担を増加する一方で、高齢人口が増加することで医療費は増大していくことが予想される。少しでも医療費を軽減し、健全な社会を保つためには

1. 高齢者が長く元気に生産性を保てるようにする
2. 生産者の心身ケアを徹底し、生産性を低下させない
3. 子供たちが健康に成長するように支援する

といったことが重要となる。このような目的のために漢方医学が果たす役割は大きいと考える。

まず高齢者医学においては個人差が大きく個別化治療が必要となるが、漢方は個別化治療をその根幹としている。また、膝痛、腰痛といった退行性変化に対しても痛みを軽減して QOL を改善するような漢方薬は多々ある。また、働き盛りの人のこころの病が問題となっているが、生産者人口の減少により一人当たりの負荷が増し、ますます精神的な重圧を受けることが予想される。漢方医学には「心身一如」という考えがあり、心と体のケアを同時に行うことが可能である。アトピー性皮膚炎などアレルギー疾患の治療や虚弱児童の治療などは漢方医学の得意とする分野であり、少子化する子供たちの健康を保つために今後ますます漢方医学の重要性が増すものと考えられる。

そもそも漢方医学には『黄帝内経』以来「未病」の治療こそが最良の治療である、という思想がある。現在のように疾患が進行した後で医療者が介入するのではなく、早期から予防に努めるような医療環境が整う必要がある。その場合にも漢方医学が大きな力を発揮していくものと期待される。